

## 趣意書

川柳発祥二五〇年記念事業に当たり

現在、私たちが受け継いでいる「川柳」という文芸の名称は、明治以降に固定したものです。その元となったのが、柄井八右衛門という人の俳名「川柳」で、その名が世に現れてから、来年でちょうど二百五十年になります。この八右衛門という人は江戸は浅草新堀端（現台東区蔵前五丁目）に現存する天台宗龍宝寺門前の名主で、宝暦七年（一七五七）四十歳の折に、前句附という附合い文芸の宗匠となり、号を「川柳」と称し、八月二十五日にはじめて万句合の第一回開キ（発表）を開始いたしました。

この川柳宗匠の選んだ句が「川柳点」と呼ばれ、独特の面白さが江戸中の評判となります。さらに、これが『誹風柳多留』という選集となり、ベストセラーになったことから、川柳の名はいよいよ高まり、その文芸は、黄表紙や洒落本などとともに江戸文学の一角に伝統文芸としての地位を占めることになりました。

現在でもひとびとが思い浮かべるような人口に膾炙した句をたくさん残した川柳の点業は三十三年間、その間『誹風柳多留』は二十四篇に及びましたが、これが現在なお隆盛にある川柳文芸の原点となりました。それからさまざまの経緯はありますが、明治の改革期を経て近代化、その始祖の号をそのまま文芸名として今日に至ったのが川柳の歴史です。

右により、川柳発祥二百五十年の節目にあたる平成十九年（二〇〇七）を「川柳の年」と位置付け、一年を通して川柳を社会に向けて発信するとともに、八月二十五日の記念日を中心に、この伝統文芸が経て来た長い道のりに思いをいたし、ひいては将来にわたっての発展を願って、各種の行事が企画され、現在準備が進行中でございますが、その企画内容は、概ね次の通りです。

- 一・川柳発祥二五〇年式典（式典・講演・句会）
- 二・「川柳発祥の地」記念碑の建立
- 三・川柳発祥二五〇年 川柳展
- 四・平成万句合募集
- 五・『川柳二五〇年の記録』出版、『川柳総合事典』改訂増補及び関連書籍の刊行
- 六・協賛各社川柳二五〇年関連事業支援

祝賀事業の目的は、「先人の遺徳を偲び、川柳文芸の発展・普及を期するとともに、川柳を通じて日本語文化の再認識、向上・発展、さらには地域振興を目指す」ことにあります。

平成一八年十月

川柳二五〇年会長 台東区長 吉住 弘

川柳二五〇年実行委員会委員長 前田 安彦

ほか実行委員会委員一同

